

地域の底力——北海道上川郡当麻町

行政と住民、 心を一つにした連携が 独自の挑戦を生む 北海道当麻町

主要産業の林業や農業を基盤とし、
前例のない取り組みを柔軟に推し進めていく。
北海道当麻町は前向きな姿勢を維持しながら、
今、多くの人や企業を惹きつけている。

北海道中央部上川盆地に広がる田畑。当麻町役場が保有する農地では毎年、田んぼの学校が開かれ、小中学生が米作りを学ぶ。写真中央のキャンピングサウナバスは、町長が発案し、民間企業や団体のアイデアを結集して誕生した。ふるさと納税の人気の返礼品（バスのレンタル）にもなっているという。

取材：文山内史子
写真：野瀬勝二

自らを町のトップセールスマンにたとえる、当麻町長の村椿哲朗氏。「役場の人材育成に力を入れており、繰り返し理念を語り続け、自らやって見せるうちに、最近ではこれをやってみたいと企画を持ち込む若い職員が増えている」と嬉しそうに語る。



「何もない」から「全部ある」へ 垣根を超えて、 今あるものを活かす

北海道上川郡当麻町は道内のほぼ中央、大雪山連峰が見守る上川盆地に位置し、約七割を山林が占める。主要産業は林業と農業で、人口は約六〇〇〇人。一帯の歴史は一八九三年に広島県や山口県から四〇〇戸の屯田兵が入植して始まり、永山村、当麻村の時代を経て一九五八年に当麻町誕生へと至る。

『「うちの町には何もない」が、かつての町民の口癖でした。でも、町出身で役場に勤めていた私は、『当麻町には何もないどころか磨けば光る魅力的な資源がたくさんある』、そのように考えていました」

そう振り返るのは、二〇二〇年から町長を務める村椿哲朗氏だ。実際に当麻町は、「ゆめぴりか」「きたくりん」といった米が長年トップクラスの評価を受け、特産品「でんすけすいか」は最高級のブランドスイカとして知られる。生産量道内一を誇るキュウリ、キクなど野菜や花きの栽培も盛んだ。

「私は、メジャーな観光地がないとか、ないものねだりが嫌いで、今あるものの中で何ができるかを考えるタイプなんです。地元だからこそ気付けない地元の良さを、うまく見せたり伝えたりすることは本当に難しい。役場のリソースだけでは限界があるので、町民や町外からの力をいかに巻き込むかが大切だと考えています」

村椿氏は役場職員の時、広報担当として、インターネット動画を作っていたという。人気バラエティのパロディーで、役場の職員がひたすら頭を下げて町民に助けを求めるといった内容だったが、ネットだけでなく、ケーブルテレビで町の全世帯に流れることも

あって、世代を問わず、反響が大きかったそうだ。当時、子どもたちの冬の遊び場が欲しいという子育て世代からの要望に対し予算がなく困っていた際、この動画を通じて助けを求めた。

「予算を確保できない町の事情を洗いざらい話したことも良かったのではないかと思います。動画に共感した新しい感覚を持つ方々がボランティアとして大勢集まり、巨大なかまくら、アイスドームが本場に完成してしまいました。この時集まった方々は、今でも当麻町で活躍していただいております、大変貴重な人材発掘の場になりました」

町長就任後も村椿氏は情報発信を重視し、自身と広報課がそれぞれSNSを活用して、休むことなく町に関する多彩な情報を伝え続



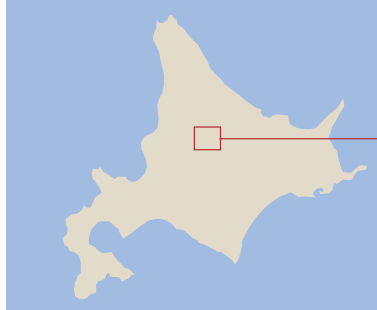
2018年に新築された町役場・議場は町産材を100%使用。木の床面が広がり、数多くの柱が天井を支える。訪れた者は当麻町が林業のまちであることを自然と意識する。

けている。

「かつて広報課は役場の中でも一番人気のない部署でした。予算もなく、全部自前でやっていました。だから。私は、当麻町職員全員が町の良さを知らしめる営業担当であり、その最前線が広報課なんだ」といつも話しています。そのおかげか、今は広報を楽しんでくれる職員が増えています。先進的な民間企業のスタッフと交流する研修プログラムも始まり、職員の発想が変わってきていますし、あらたなアイデアの提案も増えています」

行政の見える化も徹底している。時として厳しい意見も届く「町長への手紙」は広報紙やネットで公開されている。

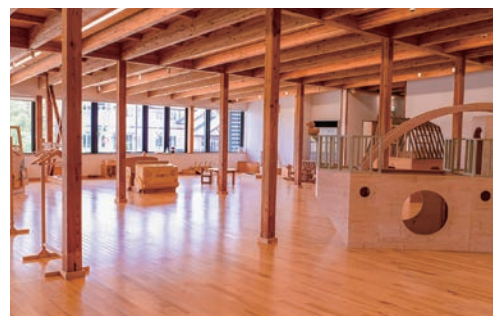
まちづくりの推進目標としては、「食育 木育 花育からつながる



心育」を掲げる。当時の町長に直
言したのが、役場職員時代の村椿
氏だという。二〇一五年に開校し
た「田んぼの学校」では、小学四
年生から中学二年生までが米を育
て、幼稚園から中学校までの給食
の米飯をまかなう。他の米と混ぜ
られないように専用のサイロで保管
する徹底ぶりだ。町ではこのため
に一・二ヘクタールの水田を所有
する。自治体が大規模な水田を持
つのは全国でも初めてで、調整は
難しかったが、一丸になって乗り
切ったという。また、町の小学六



約7,700株の花々が四季折々、景色を彩るく
るみなの庭は、家族連れで散策を楽しめる場に。



くるみなの木遊館では、木製の遊具で子ども
たちが自由に遊べる。各種イベントや木工体
験教室も開催。(写真提供：当麻町役場)

長期ビジョンで目指す 循環型林業が 若い世代の心を捉える

町の中心である当麻駅近くに、
当麻町森林組合の製材工場があ
る。道内でも森林整備だけの組合
がほとんどで、上川管内で製材工

当麻町森林組合の製材工場を案内するのは、組合長の中
瀬亘氏。当麻町内はもちろん、旭川市内からも子どもた
ちが工場見学に訪れる。「そうした中から林業を志す子ど
もたちが出てくる」と、活気のある作業風景のかたわら、
話す言葉に自然と力がこもる。



年生は、中学校での三年間、自ら
が使う学習机を町産材で製作する。
そして、花育拠点である「くるみ
なの庭」には一〇〇種以上の花が
咲き、週末には家族連れが集まる。
子どもたちは学校で、あるいは家
族とともに町の自然や産業にふれ
て育つ。そのほか多彩な子育て支
援とも相まってファミリー層の関
心は高まり、ここ数年は転入によ
る人口の社会増が続いている。

役場時代から長年林業行政に携
わった中瀬亘氏が、組合長に就任
した二〇〇九年当時を振り返る。
「もともと役場で働いていたの
で、当時の町長とは気脈を通じて
いました。当麻町には林業と農業

しかない、これをまちづくりの
土台にするしかない」と。林業は、
五〇年のサイクルで植林、保育、
間伐、主伐を繰り返す。安定的
な循環型林業を実現するために、
五〇年先を見据えた長期ビジョン
を策定しました。全国でも珍し
かったと思います。まず現在の
資源量を確認したうえで、この先
五〇年の事業量を計算しました。
そうするとこの先必要な人員や設
備が分かります。これをみて、工
場の若い担当者が言い始めたんで
す。工場を充実させるために大型
の機械が必要だと。それで町にも
協力してもらって二〇一四年に大
部分の製材機械を更新しました」
設備投資により増えた生産能力

右／2014年導入のフランス製の大型製材機械。増える町産材の需要にしっかりと応える。2019年に森林認証（SGEC-COC認証）を取得。左／製材作業で生じた端材や丸太の樹皮は、すべて再活用される。



は「地材地消」でカバーする。町役場庁舎をはじめ公共の建物は町産材を使用している。来年度建設予定の認定子ども園も町産材が使用される予定だ。個人住宅の新築時には町産材使用にかかるコストを町が助成。現在まで約二〇〇棟が、この制度を利用してきた。

「長期ビジョンに沿った人員の確保も必要です。北海道では積雪期の雇用が課題ですが、人材の定着のため、作業員の通年雇用、一年を通じた仕事量の確保を目指しました。そのうえで、事務所と現場で格差のあった待遇も、全員を正規職員にすることで、同じ体系にそろえることにしました。就業環境が改善したことで、若い世代の注目を集め、近隣の農業高校や道立北の森づくり専門学院の卒業生が、就職先として森林組合を選んできています。その中には町の本育で組合の工場見学に来ていた子もいます。一五年前に五九歳だった職員の平均年齢は、今、四一歳に若返りました」

森林組合の入っている建物の玄関には「農業合同事務所」の看板が掛かっている。森林組合のほ

か、農協や農業委員会、土地改良区の事務所が集まる。

「全国でも珍しかったようですが、前町長の声掛けで合同事務所ができました。各所属の代表が週一で集まり、意見交換、調整を行います。町民にとっても窓口がワンストップで済み利便性が高い。役場も含めてオープンにつながっているのも、他の町よりもスピード感があることが最大の武器です」

先駆性と次世代教育で未来を開拓する農業

他の地域から見れば「何でもある」ような当麻町でも、就農者は年々減少している。そうした中で、農業を営むには本当に良い時代に生まれたと語るのは、米やでんすけすいかを中心に生産する舟山農産の舟山賢治氏だ。

「父の時代に

あった煩わしい作業が本当になくなりました。最新センサーの導入や栽培管理のIT化が進み、事務所に居ながらにして、水田やハウスの状況を手に取るように把握できます。GPS機能を搭載した田植機は自動運転です。高品質が売りのでんすけすいかも品質チェックは機械化されています」

当麻町では、米を収穫した農家はそのまま農協のカントリーエレベーターに持ち込む。最新鋭の大型サイロで、乾燥後、もみのまま低温貯蔵し、出荷まで保管。出荷直前に精米するため、おいしさも



舟山農産の舟山賢治氏は、町所有の農地で催す田んぼの学校の校長を務める。「子どもたちにはかっこいい農業を伝えるようにしています。私自身、本当にそう思っていますから。将来の夢を農家だと話してくれる子どもが増えているのが嬉しい」



ほとんどの子どもたちにとって、農作業は初めての体験。田植えや稲刈りでは、町民のボランティアも参加してサポートする。
（写真提供：株 舟山農産）

増すという。米だけでなく野菜も農協にそのまま持ち込み、機械が選果して出荷する。

「農家は空いた時間で他の作物を作れるので、大変ありがたいんです。あらたな試みとして興味を持たれ、視察にいらっしゃる自治体も多いと聞きます。加えて、当麻町の農協は、設備のことだけではなく、昔から若い世代に新しいことにチャレンジさせてくれる雰囲気があります。行政ともいつも連携できているので、町もしっかりとサポートしてくれます」

舟山氏はインターネットなどを介して米や野菜の直販も行っており、とりわけ米の洗練されたパッケージデザインが目を引く。

藍、だいたい、あかねといった和色を採用したパッケージや、2合分の米を各種組み合わせるアソートボックスなど、味だけではなく、デザイン性を意識している。



「デザインは旭川の若いデザイナーにお願いしました。自分なりに商品の付加価値を高めていくことに、たいへん面白味を感じています。良い時代に生きて農業に従事できることに幸せを感じます」

農業に関心を持つ子どもが増えるのが一番のやりがいという舟山氏は、田んぼの学校の校長を開校当初から務める。小学三年生にはスイカ、五年生には米に関する食育授業を行っている。栽培に関する基礎知識はもちろん、五年生になると米の流通、最新機器の活用、さらには食料自給率の問題など、広く深く農業に関して学ぶカリキュラムだ。

「現在、一学年五〇名のうち、家が農業を営む児童は一割程度で、農作業を体験したことのない子どもが多いんです。田んぼの学校が

始まって一〇年になりますが、農業への興味が深まり、将来の夢は農家という声が確実に増えているのが嬉しいですね。一期生であるうちの長男も、間もなく農業を始めます」

そう話しながら、舟山氏は顔をほころばせた。

前例はないけれど
面白そうだから
やってみよう

当麻町はビジネスにおいても、人を惹きつけている。オフィス甲斐の甲斐綾乃氏は、二〇一三年に旭川市でアパレル関連のセレクトショップを開業。その後、



二〇一七年に当麻町に移転した背景についてこう振り返る。

「北海道でブランディングしようと考えたんです。例えば北海道のカニ、北海道のジャガイモというのは連想しやすいですね。アパレルでいえば北海道の冬場の寒さだと思いついたんです。防寒ウェアなら北海道と連想してもらえような、地域性の際立ったエリアを探しました。地元の人間にとっては札幌では暖かすぎる、北海道の真ん中の上川しかないと考えました」



ショップ内は歳月を経たはりが、趣を生んでいる。「木造建築は年数を経て味が出てくることで価値が増します。防寒ウェアも買ってよかったと長く愛用していただけることを目指しています」と甲斐綾乃氏は話す。



ショップの外観。北海道大学の築90年の製材工場を一度解体し、当麻町で組み直した。甲斐氏のこだわりと当麻町の支援で実現した。

大雪山系が彩る豊かな自然環境と冬場はマイナス二〇度以下になる気候をふまえて、複数の場所が候補に挙がる中、当麻町を訪れた甲斐氏は、大きく心を動かされる。

「役場の対応のスピード感ととにかく際立っていました。窓口でコンセプトを説明したところ、役場の職員だった現町長が当時の町長にすぐにつないでくれました。その場で町ができることを聞き、具体的な提案がありました。他の自治体では前例がないと言われ続けていたところ、当麻町では『前例はないけれど、面白そうだからやってみよう』と。それを聞いて、この町しかない、と思いました」

二〇二一年には二軒目、滋賀県の有名アウトドアメーカーのフランチャイズショップを町内にオー

ブン。役場からは町営キャンプ場に隣接する町有地活用の提案があった。現在ではそのキャンプ場をはじめ周辺施設とも連携したブランディングや告知、イベントなどが行われている。

町の人がダウンジャケットやTシャツといった自社製品を、積極的に着ている姿を頻繁に目にするのも嬉しかったと甲斐氏は話す。

「地元のファッションブランドだと大切に思ってくださる方が多く、都市部ではあり得ない現象だと思います」

現在は主な顧客である男性に限らず、家族が楽しめる場所をとの思いから、カフェの併設を計画している。インターネット販売やSNSでの発信にも力を入れており、海外からの反応にも手ごたえがある。

「マイナス三〇度でもうちのダウンジャケットがあれば寒くない。そういうストーリーを当麻町からならリアルに発信できるのは大きな魅力です。当麻町発のブランドイメージもより高まればと思っています」

障がい者が地域とともに暮らす

当麻町の柔軟性を語るうえで、一九九六年に開設した通所型の障がい者施設「当麻かたるべの森」にも着目したい。施設は当麻町内に点在するが、本体にあたるギャラリーかたるべプラスは町立中学校の隣に建つ。長年、障がい者の支援と福祉教育に携わってきた副理事長の横井寿之氏が語る。

「根強い偏見から、一般的に障がい者施設の建設は周囲の反対を受けることが多く、学校の近隣に設置できるのは極めてまれなことです。僕らが当麻町に障がい者施設をと相談した際、役場の福祉課が前向きに協力してくれたおかげ

で、もともと教育委員会の土地だったこの場所を利用できるようになりました」

かたるべの森は、その名称が表す通り、約六万六〇〇〇坪の森を有し、林業で障がい者が社会貢献できる道を開拓してきた。実践の場として私有林を購入した開所時、笹に覆われていた森は、施設利用者と職員が少しずつ尽力してきた結果、木漏れ日がさす美しい景色に変わった。



上／就労施設であるパン工房「森のぱんやさん」では通所で集まる利用者が作業を担う。

下／森の中の施設は多彩。一角には、農作業ができる畑も設けられている。

当麻かたるべの森の副理事長を務める横井寿之氏。「かたるべ」は北海道弁で、「集まって語り合うべや」という意味。「介護だけではなく障がい者とともに林業や木工、陶芸などに携わることで、職員には楽しみが増えますし、福祉の世界が広がると考えています」

「障がいのある人も地域の中で暮らすというノーマライゼーションの考え方が世界では当たり前です。日本では施設内で居住する入所型が多かったのですが、かたるべの森は周辺の自宅等から通う通所型であることが大きな特徴です。過去に農業を活用した障がい者施設はありましたが、林業はおそらくここが初めて。利用者は職員とともに間伐や薪割り、下草の刈り取りなどを行い、森を守るという社会貢献に結びついています」

森の中には木工や陶芸、織物の工房やコンサートホールが設けられ、夏場は利用者が散策を楽しむこともできる。かたるべの森で生まれた工芸品を販売するギャラリーにはパン工房があり、利用者が作業に従事する。

「森を活用して地域との交流を



当麻鍾乳洞は約1億5000万年前のジュラ紀から形づくられてきた。管状に伸びる「マカロニ鍾乳石」は学問的にも貴重という。北海道指定天然記念物。

かたるべの森美術館は障がい者の芸術活動を支援する施設。展示されている数多くの作品は色彩、造形、発想のいずれの面でも、力強く心に響く。



という計画も進んでいましたが、近年の熊の出没が障壁になっており、芸術活動を通して人と人との交流の場を広げていくという夢の実現には、まだまだ課題があります。若い世代を含めて職員の確保も容易ではありません。それでも、全国の施設や研究者の間では、かたるべの森の可能性に注目する

方々が増えてきました」

「かたるべの森美術館」は、廃校となった旧伊香牛小学校を再活用して二〇一〇年に誕生した。創作作業を希望する利用者が通う。熱心に作業に取り組む様子や、利用者が創作した既成概念にとられないダイナミックな作品が、印象深く胸に刻まれた。

地域の住民にとって自分たちが通った小学校がなくなるのは寂しい。美術館に生まれ変わった母校に足を運ぶ住民も少なくないという。

行政と住民の垣根を超えたつながり 将来世代にバトンを受け継ぐ

ひと昔前、当麻町の財政はかなり切迫しており、破綻もささやかれる状況だったという。前町長が民間感覚を持ち込み、大ナタをふるった。「この町にはなにもない」ところからの出発だった。

「予算がない分、何でもトライすれば良い、町内外の人材を巻き込むしかない。それを前町長は認めてくれたんです」

そう振り返る村椿氏は、イン

ターネット動画に取り組んだ頃の話から、最近、民間企業と連携して誕生した全国初のキャンピングサウナバスまで、多彩かつ多角的な取り組みを、本当に楽しげに語り続ける。いずれも「身の丈に合ったことしかやっていない」という。林業や農業、自然環境など、「今あるもの」をまっすぐに見つめて、突き詰めたうえでのチャレンジだからだ。

もう一つ気付かされたのは、行政や産業の垣根を超えたオープンな雰囲気やつながりだ。

「当麻町は町役場や各組合、農業者や商工事業者の皆さんの仲が良いいよねと町外の人によく言われるんです。しょっちゅう顔を突き合わせて、『営業』にも一緒に出掛けるからでしょうか。また、農家同士でも、新しい技術があれば出し惜しみせずにオープンにして共有する意識が定着しています。他の町では珍しいそうで、これが当麻町のスタイルだと思っています」

そう語ったのは村椿氏だが、取材中、他でも同様の話を聞くことができた。オープンなつながり、

当麻町スタイルも当麻町の大きな強みのようだ。

やがて「食育 木育 花育」に育まれた子どもたちが、そのバトンを受け継ぎ、当麻町の魅力を高め続けることだろう。

役場が推進してきた「声かけ・あいさつ運動」が実り、面積二〇四・九〇平方キロメートルの小さな町を巡れば、すれ違う子どもたちの挨拶に和む。

